

教育実習の 報告

備えあれば「反省」あり

田代 奈那美
(史学・文化財学科4年)

1年前の私

数か月後には3年生の皆さんは教育実習に取り組んでいる人がたくさんいるだろう。みなさんは数か月後に教壇に立っている自分自身の姿を想像できるだろうか。



私は去年の今頃全く想像がつかなかった。教員になりたいとは思っていたが、私が教壇で授業を行うことが果たしてできるのかと思っていた。みなさんはどうだろうか。不安な気持ち、楽しみな気持ち、まだ実感がなかったりそれぞれだろう。そのような気持ちを持ちながらも、教育実習をむかえるまでの間に何をすればよいのだろうか。

私は教育実習前までに何をしていくべきなのか考えた。

教育実習までに備えたこと

① 1週間前

実習は母校の中学校で3週間行った。私が中学生の時は、全校生徒が多く、元気があるパワフルな中学校だった。今の生徒は明るい声であいさつし、さわやかな印象をもった。

教育実習の打ち合わせは1週間前に行われた。担当するクラスと授業するクラス、授業の範囲を知らされた。授業は中学2年生の歴史の授業で、私の得意な範囲だった。教材研究に一層力を入れなければいけないと思った。また、教科担当の先生から3クラスを担当し10時間ほど授業を行うと聞いた。

さらに、クラス担任の先生からは道徳の授業も行うことも知らされた。

授業の範囲が私の得意範囲だったとはいえ、私が好きなことではなく中学生にいかに関心を持たせる内容を準備するか。その為にも例えば1つ1つの用語を丹念に調べておいた。教材研究の他に私は中学生だったときを思い出すことにした。中学生の時の私は勉強よりも部活に力を入れていたこともあり授業の風景の記憶が薄かった。しかし、その中でも印象に残っている授業を思い出すことにした。特に道徳の授業は私の受けた授業や私の体験をもとに行いたいと思った。そこで、私が中学生だった時のノートやファイルを探しだして参考にした。特に道徳のファイルは当時の私の気持ちや考え方が今の私に伝わってきた。教育実習に大いに生かせると思った。

② 9か月前

教育実習までにどんな準備ができるだろうか。教育実習の具体的なイメージがつかなかった。しかし、私は1年前の今頃に事前の指導で先輩方の教育実習の感想を聞いて特に教材研究が大切だということを学んだ。

去年の11月に初めて模擬授業を行った。模擬授業の準備といっても最初はどこから手を付けたらいいのかわからなかったので先輩からのアドバイスをもらうようにした。ワークシートを作成したり発問の内容を考えたり、生徒の興味関心を引くように工夫などをした。

初めての模擬授業を行った後、教材研究不足を痛感した。教えるということは難しいということを実感した。

模擬授業を行ったことで板書の難しさを感じたり、机間指導の必要性を考えたりすることができた。特に板書はなかなか行うことがないので全くうまくいかなかった。人前に立って話すことも日頃あまりないので話し方も気を付けていたがうまくいかなかった。初めての模擬授業は私にとって満足いくものではなかった。

先輩方に実習の感想やアドバイスをもっと聞いた。板書のコツや机間指導や教材研究の仕方などを

聞いたりして、教育実習に生かしていけるようにしたいと思った。こうしたことを行うことで教壇に立った時のイメージを少しだが広げることができた。

「反省」の連続

教育実習の3週間は長いようで短かった。授業は社会科と道徳の計13回行った。最初は生徒とのコミュニケーションをうまくとることができるかどうか心配だったが生徒は明るく挨拶をしてくれ、授業にも積極的に取り組む姿勢がみられた。私自身も生徒に答えることができるように授業がより分かりやすくなるような改善を加えていくことが出来た。

あらかじめ何度か練習をしたことで少しは上手く授業を構成できたり内容を深めたりすることができたと思うが、特に板書についてはまだ私の努力不足を痛感することが多かった。また、授業であつかう内容も使う資料もまだまだ工夫ができるとおもった。教育実習前に行ったことは決して無駄ではなかったと思う。さらに、机間指導やワークシートの作成や授業中の話し方ももっと改善できると思った。

一方で現場に行ってみないとわからないこともたくさんあった。生徒との授業中でのコミュニケーションや給食指導、学活の時の伝達のその他にも実習中には市中体がありその引率での先生方とのコミュニケーションや生徒指導のありかたなど多くのことを学んだ。

私は実習前に緊張や不安という気持ちはあまりなかった。どんな生徒がいるのだろうか。どんな授業を行っていかうか。どんな話をしようか。そんな気持ちを持ちながら期待する気持ちは大きかった。そのように思っていたのも実習前に準備をしていたからこそ思えたのだと思う。

十分な備えがあったこそ教育実習が生きる

教育実習はまだ先だと思っている人、緊張している人、不安に思っている人などいろんな思いが3年生皆さんにはあるだろう。

皆さん方にとって実りの多い実習になるか悔いの残る実習になるかはこれからの準備次第であると思う。

私のクラス担当の先生が「僕たち教員でも正解は

ないし、どれが正しいとかないうからずっと勉強し続けるんです。」とおっしゃっていた。私はこれからも教員を目指したいと思う。教育実習ではたくさんのことを学んだ。特に3年生の皆さんには早めからの十分な備えを進めたいと思う。

わたしの対応と指導教諭の対応

岩野 愛理

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は、7月の初めから3週間、母校の中学校で教育実習を行った。実習生は私1人だった。

指導教諭は1年1組の担任で、国語の先生だった。授業も学級経営も、その先生のもとで観察した。

私は大人数の前では大きな声で話すことができるのだが、1対1だと急に自信がなくなってしまい、緊張してしまうタイプである。こういった性格は一人ひとり違うと思う。

私の場合、このような理由で生徒指導は正直言うとなかなかうまくいかなかった。しかしゆえに、そこから学ぶこともあった。皆さんには私の経験や学んだことから、ぜひ来年の教育実習に生かしてほしいと思っている。

Aさんの場合

Aさんはちょっとませた感じの女子生徒だった。彼女は、思い通りにならないと怒るという性格だった。

困ったことが起きたのは1年生だけのクラスマッチのときだった。指導教諭が体調不良の生徒を保健室に連れて行くことになった。その場に残された私が急きょクラスマッチの監督を務めた。

このクラスマッチでは「1枚の新聞紙の上に何



人乗れるか」という、クラス内の男女問わず、密着しなければならない競技があった。クラス全員が「よし、やるぞ!!」という雰囲気の中で、Aさんが突然大きな声で「男子とくつつくの??やだあ——!!」と叫びだした。

一瞬私は呆気にとられた。「やだって言われても…」と完全に思考停止してしまった。周囲にいた気の弱そうな男子たち数名は縮こまってしまい、クラスのために戦う意欲がまったくそがれてしまった。Aさんにつられるように、他の女子も「私もやだな…」「私には関係ないや…」と負の感情が連鎖していった。

このときは、ひとまず2回戦あったので「じゃあ1回戦は男子だけで、2回戦は女子だけでやろうか。」と私は提案した。振り返ってみれば、これはあまりいい方法ではなかったと思う。結局クラス内の男女を分断させてしまったし、クラス全員の一体感を損なわせてしまったままだったと思ったからである。Aさんの言いなりの「都合のいい先生」になってしまったような気がした。指導教諭にクラスマッチ終了後、事情を報告したときに1つのアドバイスをももらった。

「クラスマッチは協調性を育てるいい機会なので、先生が楽しむのも大事ですが周囲を見て、その場で指導しましょう。全員が気分の悪いままクラスマッチを過ごさないために、皆が問題に早く気付くために、その場でタイミングを逃したら帰りの会の時でもいいです。ちゃんと注意しましょう。楽しんでいない生徒を巻き込んであげるのも大切です。」

Bくんの場合

Bくんは忙しい男子生徒だった。給食の時間に話していたが、彼はサッカー部に所属しながら、英会話スクールと学習塾に通っており、さらには地域の空手クラブにも所属していたようである。これほど多く習い事をしている生徒は少ないのではないだろうか。

部活はとても頑張っていて、学習にもそれほど問題はなかった。ただ彼の問題は「授業中の居眠り」という点だった。私の授業に関わらず、他の先生方

の授業も大半は居眠りをしているそうだった。

私は非常に注意しづらかった。彼の私生活を知ってしまったので、「起きなさい!」と怒るのは酷かな…などと迷いが生じてしまっていた。生徒の事をわかればわかるほど指導するのに同情してしまって心が痛むものである。頭ごなしに注意するのではなく、生徒の背景も考慮しながら注意することが大切だと思ったので、「Bくん大丈夫?大変だと思うけど頑張って起きてね」と声をかけた。

しかし、振り返ってみれば、これもいい方法だとは思わなかった。彼にだけ甘やかしているような気がしたし、やはりしっかり注意するべきところは注意することが大事だと思ったからである。これも指導教諭に相談してアドバイスをもらった。以下に記しておく。

「大事なものは「言い方」ではなく「内容」です。いいことはいい、悪いことは悪い、と指導してあげましょう。わからない(判断がつかない)場合は教師同士で相談しましょう。生徒の将来のために思っている事なので、生徒がつかなくても心を鬼にしましょう。」

おわりに

Aさんの場合もBくんの場合もほんの1事例であり、他にも生徒指導で困ったこと、学んだことはたくさんあった。しかしこれは学校や生徒によって異なり、千差万別である。ありとあらゆる事例を聞いて、柔軟に対応してほしい。

私はあまり生徒に対して怒ったり、注意したりするタイプではなかった。生徒たちにちゃんとした指導をしてやれなかったと少し落ち込んでしまった。

指導教諭からは「そういうタイプの先生もいていいんじゃないですか。」と指摘してもらった。

「色々な教師がいるから生徒との関係の作り方も色々なんです。ずっと見守る教師もいればこまめに注意して嫌われ役になる教師もいる。生徒と一緒に失敗してしまう教師もいるし、ダメなことははっきりダメというメリハリのついた教師もいる。あなたのように生徒とじっくり丁寧に向き合う教師もいていいと思います。そのやり方があなたらしくていい

と思います。」

私はこの言葉をもって、少し自信を持つことができた。「私らしいやり方」で生徒の事を知り、見守り、指導することができていたんだと前向きにとらえることができた。

3年生の皆さんは、理想の教師像があるだろうか。「こんな先生になりたい」「この先生すごいな」と思う人がいるだろうか。教育実習中は、そんな先生と出会う、自身の授業・指導とのギャップに落ち込んだりきついたり感じたりすると思う。きっと楽しいだけでは終わらないだろう。そんな中でも皆さん自身のいいところや可能性、今まで気づかなかったような素敵な魅力を見つけることのできる教育実習にきっとなると思う。

変化を起こす少しの工夫

新名 教史

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は、今年の5月27日から6月16日の3週間母校の中学校で教育実習を行った。担当の学級は1年4組で朝の会や、給食指導、清掃指導、帰りの会、自習時間の監督などを行った。主に、実習の指導を行ってくださった先生は、担当学級の先生であった。授業は、1年生の全4クラスを担当させてもらった。私からは、この教育実習で学んだ生徒との関わり方について報告したいと思う。



気になる冷たい視線

教育実習の初日、午前中はなかなか生徒たちと関わる機会が持てずにいた。

食の時間になり、ようやく話す機会が持てた。まずは生徒たちの顔と名前が一致するように名前を確

認しながら話すようにした。そうすることで生徒たちもこちらに興味を持ち、私の名前を覚えるように努めてくれ、様々な質問をしてくれるようになった。給食の後、昼休みではさらに多くの生徒たちと話す機会を設けることができた。最近、中学生のなかで流行っているものは何かなどを聞くなどして、より生徒たちの中に入って行けるように努めた。

5、6時間目では、担当することになったクラスで授業観察を行うことになった。初日の午前中はほぼ全員が私を、不思議そうに見ていたのが、この午後にもなると笑顔を向けたり、質問をして来たりするなど、どうやら私のことが少しずつ気になっているように思えた。しかし、私を冷たい視線で見つめる生徒も何人かいた。初日からいきなり全員の心を掴むことは難しいことだと痛感した。

私は子供たちと関わることには自信があったので、初日で全員の生徒の心を掴むことは出来るだろうと思っていた。しかし中学生ともなると生徒一人ひとりが自分の考えを持っており、子ども扱いしてはいけないのだと痛感させられた。

教師である自覚を持つ

初日はやはり、自分自身が教師であるという自覚をもって挑んでいくのはなかなか難しいことではある。しかし、この初日で生徒たちに教育実習生は遊びに来たわけではなく、学びに来ている身であることを行動で示すことが大事である。さもないと特に中学生はこちらに興味を持ってくれる場合が多いため、私たちを先生ではなく少し年上の友達の感覚で接してくる可能性が高い。

実習が始まる前にしっかりと私たちは何のために教育実習に行くのかを再確認し、先生と生徒の線引きが崩れないようにしておくべきだと私は考える。

少しの工夫

実習が中盤に差し掛かり、生徒たちとの壁が無くなったと感じ始めた時、私は生徒たちの態度が変わってきたことに気付いた。

それまでは授業観察を行うことが多く、授業に参加したとしても生徒の前で音読をするのみであっ

た。そうした中、生徒たちに変化が現れた。それは敬語を使い、接してくれていた生徒がため口で話しかけてくるなど、生徒たちは私に慣れてきて先生としてみていないように思えてきた。

そこで私は変化を起こすことが必要であると考えた。まずは私を「先生」であると改めて見てもらうためにはどのようなことが必要か考えた。思いついたのは、昼休みにクイズ形式で問題を出すことだった。出題する問題は、担当している国語の問題だけでなく、様々な教科の問題を出すようにした。すると生徒たちは、私が少し年上の友達という感覚ではなく、「先生」であることを再認識してくれるようになり、さらには信頼を得ることができた。

実際にこれを行ったことで、多くの生徒たちがクイズに興味・関心をもち、すでに私のことを信頼し、いろいろな質問をしてくれていた生徒たちはもちろんのこと、冷たい視線で私を見ていた生徒たちも信頼してくれるようになり、自分の分からないところを質問してくるようになった。

終わりに

教育実習の3週間は長いようであっという間に終わってしまう。生徒たちの信頼を得たと思っていたら、終わりを迎えてしまう。短い期間でどれだけ自分から動いて生徒たちの心を掴むかが大切となる。

私はこの実習で教師であるためには信頼を得ることがどれだけ大切であるか改めて感じた。信頼を得ていないと難しいこともあるからである。

私は実習中に生徒たちの喧嘩を目の当たりにした。その時は他の先生たちはおらず、私自身で対処するしかなかった。その喧嘩は男子同士の喧嘩でつかみ合いまで発展していた。そのためまずは、一人一人の言い分を聞き、お互いの悪いところを認識させ、心を落ち着かせた。その後、お互いに謝らせた。こうしたことで喧嘩を治めることが出来た。ここでも生徒たちとの間に信頼が生まれていたからこそ、私が話すことで理解してくれたように思えた。

皆さんは、今教育実習に対して様々な不安や、期待があると思う。確かに教育実習とは簡単なものではない。私も多くの失敗をし、生徒にも先生方にも

たくさんの迷惑をかけた。皆さんがどこの学校に行ったとしても最初からは上手くはいかないと思う。だからこそ事前に準備して心構えをしておくことで自分の自信にもつながり、必ず成功させることができる。皆さんが教育実習を終えたときには「教師になりたい」と改めて感じられるような充実したものになるように心から願っている。

観察・アンケート・反省の連続

園田 康 敬

(史学・文化財学科4年)

はじめに

私は、5月17日～6月7日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。3年生に配属され、授業実践では社会科のうち、歴史的分野の授業を計12回行った。



ここでは、授業実践の準備、計画を主に取り上げる。

授業観察で学んだこと

私は、教育実習期間中に、指導教諭の社会科の授業を中心に、ほかの社会科の教員の授業も含めて、合計で23回授業観察を行った。

そこで学んだことは、授業におけるグループ・ワークの必要性である。

指導教諭の授業では、ワークシートを作成し活用し、授業を行っており、4人ほどの小グループで教科書の文章を参考にワークシートの穴埋めをさせ、そののち授業で確認するという方式をとっていた。グループ・ワークにおいては、多くの生徒が積極的に意見交換していた。一方で、指示がわからなかった生徒に対しては、時折先生が丁寧に説明し、生徒の理解を促していた。このことによってクラス全体が、意欲的に学習に取り組む環境となり、活発に意見交換が行われていた。

こうしたグループ・ワークは、私自身が中学校、高校で受けてきた教員から一方的に教わるといった受動的な授業と比べて、より一層知識定着がなされていくと思い、グループ・ワークを行うことは必要であると感じた。

社会科アンケートの実施

生徒一人一人の実態を把握し、指導していくことが求められる。授業では、生徒の興味・関心の度合いを把握していくことが必要不可欠である。

そのため私は、「社会科アンケート」を実施し、生徒の実態を把握することにした。アンケートでは、「1. 歴史の授業は好きか?」「2. その理由は何か?」「3. 好きと答えた人は、好きな時代・人物をあげてください。」「4. 歴史に関する本、あるいは番組を見たことがあるか?」という設問を設けた。

アンケートの結果は、「好き・どちらかといえば好き」と答えた生徒が52.1%であった。理由として、「勉強していくうちにわかるから」、・「歴史の流れを知ることによって昔の人の考えや知識を知れるから」といった理由が上がっていた。

好きな時代については、縄文時代から明治時代まで様々な時代が上げられたが、人物では、戦国時代や、江戸時代に活躍した武士があげられ、近世に興味を持っていることがうかがえた。

一方で、「どちらかといえば嫌い・嫌い」と答えた生徒は47.4%に上った。その理由として、「役に立たない」・「得意ではない」・「たまに理解しきれない」・「面白くない」という理由が上がっていた。

こうした結果を受けて、歴史好きの生徒はさらに好きになるように、嫌いな生徒は少しでも歴史に興味を持てるように、プリントを作成する際には多くの図を入れてみたり、教科書記述には見られないが、関連する雑談を加えたりするなどの工夫を心掛けることにした。

反省から学んだこと

授業を行うたびに多くの反省点が得られた。なかでも、教材研究がいかに重要であるかを繰り返し痛

感じた。

特にそのように感じたのは、私が研究授業で「江戸幕府の成立と鎖国」という単元の授業を行った時である。この単元は、江戸幕府の外交政策である、朱印船貿易、鎖国について学習する単元で、とりわけ「鎖国」が鍵となる授業になる。

「なぜ、江戸幕府は鎖国を行ったのか」と問い、グループごとに考察させるという授業を計画していた。しかし、鎖国の理由は教科書に記述されているため、生徒たちは考察することなく教科書に記述されているままを発表することになった。

また、授業で使用するプリントは、結果として学習指導案の「本時の学習過程」に記していた展開にそぐわない構成となってしまう、そのプリントをもとに授業を行った結果、計画していた授業展開とは多少異なる授業を行うことになってしまった。教材研究をより綿密に行う必要があると大いに反省した。

さらに、この授業を参観されていた教頭先生からは、「学習指導案は、他の教員でも同じような授業ができるようにする必要がある。」という指導を頂いた。このことから、教育実習前まで学習指導案は自らだけがわかるように記しておけばいいと思っていたので、反省させられ、それ以降は簡略するのではなく、事細かに指導案を作るよう心掛けた。

繰り返し反省することで、別の学級で同じ単元を扱った際は、生徒に教科書を閉じさせて考察させることができ、教材研究をしっかりと行い、学習指導案とプリントの内容が繋がるような授業展開を計画し、実践することができた。言うまでもなく、その際の学習指導案は事細かに記されたものとなっていた。当初に比べて、滞りなく授業を行うことができたと思う。

終わりに

その他にも、教育実習において学んだことは数多い。例えば、生徒の興味・関心を引く方法として、映像資料の活用がある。私は実践しなかったが、参観した指導教諭の授業で活用されていた。生徒の興味・関心を引き付けるには、数多くの方法があるこ

とを改めて教えられ、今後は、活用していきたいと思った。

授業の準備・計画を行う上で大切にしたいことは、生徒理解に基づいて行うことである。そのためにも生徒と日ごろから交流することが大切である。また、授業の練習の段階で、たとえ上手くできたと感じたとしても、実際に生徒の前に立ち授業を行うと、思い通りにはいかないことがある。特に、時間配分では、想定よりも時間が足りなくなってしまうことが大いにある。

このようなことを踏まえながら、今のうちから授業の準備計画を行い、練習を重ねてほしい。

生徒とともにつくる授業

中村 舞

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は6月13日から7月1日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。担当した学年は2年生で、授業は計18回行った。

ここでは、授業観察・授業実践で意識したこと、授業実践をしていく中で変わってきた私の目指す授業の形について述べていきたい。



授業観察で感じた不安

教育実習の最初の3日間は、ずっと授業観察を行った。40人という生徒の多さ、生徒たち一人ひとりの学力差、カタカナで読み方を書かないと英語が読めないという生徒の存在を目の当たりにし、大変不安を感じた。

そうした不安を感じながら特に時間配分と先生の指示の仕方に注意をしながら授業観察を行った。中学生は板書を写すのにも思っていたより時間がかか

る。何にどのくらい時間がかかるかを意識して授業観察を行ったことで、私の授業を組み立てるときにもかなり参考になった。また、英語の授業はクラスルームイングリッシュを使って行われる。「静かに」という表現も英語では“Be quiet.”や“Stop talking.”など様々な表現がある。普段先生方がどの英語を使い、どの英語なら生徒が理解できるのかを把握し、私の授業にもそれを取り入れるようにした。

生徒全員が参加できる授業づくり

実は私は中学生のとき、英語が大の苦手だった。だからこそ、苦手な生徒でも「わかりやすい授業をすること」が私の教育実習前からの目標だった。

しかし授業実践をしていく中で、様々な生徒がいる教室で、全員が同じように「わかる」ことはとても難しいことを実感した。そこで、「わかる」授業をするよりもどのような生徒でも「参加できる」授業をすべきだと考えるようになった。

生徒全員が参加できる授業づくりで意識したことは、以下の3点である。

① 生徒の発言を拾うこと

最初のうちは、授業中の生徒とのコミュニケーションが取れていないように感じた。問いを投げかけてもなかなか生徒からの反応が無かった。私が一方的に進めていく授業になっていたからだ。

指導教諭から「生徒たちは聞いてほしいという気持ちで私語をしていることもある。メリハリをつけることも大事だが、授業に関係ない発言も拾ってあげたほうが、生徒たちも授業に入っていくやすくなる」というアドバイスを頂いた。

その後は臨機応変に生徒の言葉を拾っていきながら授業を進めていった。すると、問いに対しての返答も早くなったし、生徒たちがわかっていないときに生徒から自主的に発言するようになった。最初は指導案の計画通りに授業をするだけでも精一杯であったが、できる限り生徒のほうに耳を傾けて授業を進めていけるようになった。

また間違った解答を拾うことも重要である。英語の授業は英語でのあいさつから始まるが、最初は、“Good morning, Mr.Nakamura.”という生徒が何人か

いた。生徒の間違いは時に「面白さ」に変わる。また、女性の先生にはMs.、男性にはMr.を使うという復習にもなる。

授業を成立させるためには、教師と生徒の信頼関係が不可欠である。こちらがしっかりと聞いているよという姿勢を示すことによって、生徒も聞くという態度をつくることができるのだと思う。

② 生徒の発言をする機会を多くつくること

どうしても新しいことを教えるときはこちらから一方的に説明しがちである。私自身、指導教諭から「先生の話す時間が長い」と最初のうちはよく言われていた。教師が話している時間は生徒たちにとってはただ聞くだけで、眠くなってしまいう時間である。そして内容も定着しない。

他の英語科の先生は、「発表をして正解をいうことができたなら、生徒にとってはそれが自信につながる。そしてその生徒たちにとって、その知識は頭から離れづらい」とおっしゃっていた。そのことを意識して、授業実践後半は、新しいことを教える際も、「これはどういう意味だった?」「be動詞の疑問文はどんな語順だったかな?」など既習事項と関連させながら生徒が発言する機会を多くつくった。授業をする私にとっても、生徒の発言によって生徒がどこまで理解できているのか把握しながら授業を進めることができた。

③ 生徒同士が教え合う機会をつくること

50分という限られた授業時間の中で、40人全員にきめ細やかな指導をすることはほぼ不可能であると思う。そこで、ペアワークやグループワークを取り入れることで、生徒同士が教え合うという時間を多くつくるようになった。生徒の力を借りることも重要で、生徒も含めみんなが授業をつくっていくことが重要だと感じた。

また、ペアワーク・グループワークを多く取り入れた理由は他にもある。教育実習初日に、実習校の校長先生から「教育の目標は（教育基本法の第1条にもあるように）人格の完成を目指すこと。知識を身に付けさせるだけでなく、教科の授業を通して、どのような人間を育てたいのか、しっかり考えてほしい」という言葉をいただいた。私は校長先生のお

話を聞いて、英語の文法や語彙を習得するだけでなく、多くの人としっかりコミュニケーションをとれるようになるということも英語の授業を通して身に付けてほしい能力の一つであると考えようになった。

教育実習での授業実践を通して、ただ知識を与えるだけの授業になってはいけないこと、そして授業は生徒とともにみんなで作っていくものだということを学んだ。

結果として、全員が「参加できる」授業づくりを目指すことによってみんなが「わかる」授業に一步近づけることができたと思う。

おわりに

「わかりやすさ」を目標に、授業の質の向上のため、模擬授業や教材研究など、様々な準備をしてきた。しかし、教育実習では、実際に生徒たちを目の前にして、私は全員が「参加できる」授業を目指すようになった。

どのような授業を目指すのかを早めにしかりと考えることが、教育実習中に予想していなかった意味のある気づきに出会うことになる。

教員・職員から学んだこと

佐野 めぐみ

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は、5月30日から6月17日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。教科は国語で、担当学級は1年3組であった。授業は1年生の4クラスで行うことができた。最初の1週間は指導教諭や他の先生方の授業を観察し、残りの2週間は授業を実践した。



木を見て森を見ず、森を見て木を見ず

私は実習で失敗をした。最初の頃、私は1人1人丁寧に机間指導を行っていた。そうすることで、全員で理解しながら授業に取り組むことができ、全員が分かる授業になると思っていたからである。しかし、ある日授業後に指導教諭から「さっきの授業の机間指導の時、〇〇さんに熱心に教えていたけど、その時〇〇君は何をしていたか分かる？」と言われた。その時になって初めて、1人1人丁寧に指導するあまり他の生徒のことが見えていなかったということに気付いた。個々に目を向けすぎてしまい、全体を把握できていなかったのである。

また、私は机間指導をしている時、出来ている生徒には「すごい、出来ているね。」と伝えていた。ところが私のその一言で、生徒は考えることを止めてしまい周りとの別な話しをし始めていた。出来ていることを伝えたことによって、生徒の集中力が途切れたのである。私が発した一言が、生徒の集中力を奪っていた。

机間指導は、ただ1人1人の様子を見たり、生徒が出来ているかを見たりするためのものだと思っていた。しかし、机間指導は常に全体を把握したうえで確かな意図を持って行わなければならないと痛感した。

森にはカラーがある

同時に各クラスには、独特の雰囲気や特徴がある。指導教諭の授業はどのクラスでも同じであったが、指導方法はクラスごとに異なっているように見えた。そのことを疑問に思い、指導教諭に尋ねたことがあった。

例えば音読の仕方である。落ち着きがあり集中力のあるクラスは段落ごとに数名の生徒に音読をさせても、他の生徒たちも同じように黙読ができる。しかし、落ち着いているが集中力のないクラスは、1文1文追い読みをさせて全員に緊張感を持たせなければならない。さらに、私語が多いクラスでは一斉読みをさせて、1人1人に音読をさせるようにしなければならない。

「音読というのは、生徒にとってさぼりやすい活

動である。しかし、それをいかに全員に読ませるかが大切になってくる。」

指導教諭はそのように話してくださった。

私は教育実習に臨むまで、音読の仕方を変えるのは小説、説明文など單元ごとに変えることだけを考えていた。しかし指導教諭の話聞いて、クラスごとのカラーを把握し、そのカラーごとに指導方法を変えることの大切さを知った。

森の向こう側

私は実習中、掃除時間の指導に悩むことがあった。中には見ていなくても真剣に取り組める生徒もいたが、ほとんどの生徒が雑巾を足で踏んで拭いたり、ほうきを引きずっていたりと、中途半端な掃除をしていた。私も他の先生方と同じように注意していたが、なかなか生徒たちは変わらなかった。

そんな中、図書館の職員にある話を聞いた。その職員は、私が中学生の頃からいらっしゃる方で当時からよく話をしていたため、その時もいろんな話をしてくださった。

図書館は、教室に比べて教員の目が行き届かないところということもあり、真剣に掃除に取り組まない生徒が多く見られる。ある日、掃除時間になっても遊んでばかりいる生徒たちがいたそうである。ところが、理由は分からないが真面目に掃除をしていた時があった。その職員はとても嬉しく思い、担任の先生にその時の様子を話したところ、担任の先生もとても喜んだ。

後日、同じ生徒たちがまた掃除時間に遊びだしたそうである。この前のように彼らが掃除をするにはどうすれば良いのか悩んだ職員は、掃除をきちんとしていたときの様子を担任の先生に話したら担任は非常に喜んでいて、彼らに話した。すると、彼らはそれが嬉しかったのか、それとも担任をっかりさせたくないと思ったのかは分からないが、とたんに真剣に掃除をするようになったそうである。

担任の先生と図書館の職員は生徒たちに注意をしている訳でもなく、また担任の先生と生徒の間には言葉もなかった。私は、この話を聞いて自分のやり方を見直そうと思った。ただ注意するだけではな

く、その基盤として生徒との心の繋がりが必要なのである。

こうした生徒の変化は、図書館の職員と担任の先生の繋がりがあったからこそ生まれたものだと思う。教職員同士のコミュニケーションは生徒の成長に繋がっているのである。

残念ながら3週間では、私と担当した生徒たちの間にそこまでの繋がりは築けなかった。しかし、これからも教職員や生徒たちとの繋がりを大切にしていきたいと強く思った。

おわりに

教科指導は、個々と全体をそれぞれ把握しながらバランスよく行う必要がある。生徒指導は、教職員や生徒との心の繋がりが必要である。そして、2つに共通することは目の前のことにとらわれず、常に視野を拡げることだと思う。

学校にはいろんな先生方がいらっしゃる。皆さんも、実習に臨む際には多くの先生方と話し、視野を拡げて考え、行動してほしい。

生徒に頼られる先生になるには、生徒をよく見る。見るふりはダメ!!

小 牧 賢 生
(史学・文化財学科4年)

はじめに

5月30日～6月17日の3週間、母校の中学校で教育実習を行った。担当学級は1年2組で、2週目から社会の歴史的分野の授業を1年1組～3組で合計12回実践した。

実習初日まずは第一印象が大事だと思い挨拶を積極的に行い笑顔で接することを心掛けた。また生徒の名前を早く覚えるために自分から話しかけた。1年



2組の生徒は話しかけてくれる生徒が多かったため早い段階から打ち解けることができた。1年2組と過ごした3週間の中で私が学んだことを紹介する。

初日の出来事

実習初日、私は生徒の名前を早く覚えるためにスケジュール帳にメモしていると、3人の生徒が近寄ってきて「私たちの名前も書いていい？」とスケジュール帳をとって私の見えないところで書き始めた。書き終わった後、見てみると一人の生徒がこんな言葉を残していた。「生徒に頼られる先生になるには、生徒をよく見る。見るふりはダメ!!」これを見て正直驚いた。私のことを言っているのかと不安になった。よく見るとはどういう意味なのか、なぜこんなことを書き思ったのかはその生徒には聞かなかった。この言葉を受けてから生徒一人一人の言動をしっかりと見て良かったところは褒め、悪かったところは注意するように心掛けた。

掃除の取組

掃除の時間は空き教室の清掃を行った。曜日ごとに何をするか役割が決まっていたが、一生懸命する生徒とそうでない生徒と2つに分かれていた。掃除をしていない生徒に対して一生懸命している生徒は何も声かけしていなかった。私は怒ったりしない性格で、毎日のように掃除しようと優しく声かけし注意したがなかなか動いてくれなかった。担任の先生に相談したところ「何をするか細かく指示するといよいよ」と指導を受けた。その後掃除をあまりしない生徒に対し「今日はこの窓をふいて」、「後ろの棚の中をふいて」と細かく指示した。また自分自身が積極的に掃除を行い動いている姿を生徒に見せ、掃除をしなければならないと気付かせるようにした。

授業実践の反省

2週目から授業実践を行い、最初の授業は担当学級である1年2組だった。緊張の中一層懸命生徒に伝えようという気持ちが大きく一方的な授業になり、受ける生徒も自分自身もきつと感じるものになってしまい反省点が多かった。指導教諭から「教

室の後ろにいる生徒は授業に参加できていなかったよ。教壇を降りて生徒が活動できる場を設け机間指導を行った方が良い」とご指導いただいた。

このアドバイスを受け次の授業では課題を設け生徒に考えさせる活動を行った。私は教室を周りわからない生徒に対しヒントを出しながら指導した。

その反面、授業実践で苦労したことは、中学生でも分かるような表現・指示の仕方である。授業を行う際に作成したワークシートに今日の授業のまとめを書こうという項目を作った。しかし自分の言葉でまとめようという形式にしたため中学校1年生にとってはまだ難しく、まとめにいくまでの授業の組み立てができていなかったと反省した。また授業で事象を説明するとき中学生にとって分かりにくい言葉を使ってしまった。生徒の事を考えて説明する際は一度生徒にこの言葉を知っているか問いかけたり、たとえ話をしたりすることで生徒の理解度も変わってくると思う。教科書の何ページ開いてと指示してもそのページを開くのに長くて1分くらいかかったこともあった。

生徒の意外な一面

1年2組は授業開始前や授業中での私語が多かった。一人の生徒が積極的に静かにしようと呼びかけを行っていた。この生徒は授業中や帰りの会などで発表する時に緊張して言葉が上手く出てこないと私に相談してきた生徒だった。しかし一回でなかなか静かにならず困った様子で私に助けを求めてきた。発表するのが苦手な生徒が積極的に静かにしようと呼びかけしている姿に感心し、私はその生徒以上に注意するよう心掛けた。

実習開始から8日目、毎日の宿題である自学のプリントの確認とコメント付けを担当の先生からお願いされた。確認していく中で色ペンを使って丁寧に仕上げてる生徒もいれば、簡単に済ませている生徒もいた。教室では大人しい生徒の自学のコメントに「僕は人見知りだけど先生ともっと話したかった」と書いてあった。すでに3週目に入っていたが、その生徒とはなかなか話すことができていなかった。これはチャンスだと思いすぐ次の日自分から話しに

行った。するととても嬉しそうな表情を浮かべて話してくれた。

おわりに

私は3週間の教育実習を振り返ってみて初日に生徒が書いてくれた言葉「よく見る」とは何か自分なりに考えてみた。「よく見る」ということは今まで知らなかった生徒の一面に気付くことであると考えた。生徒一人一人がどのように学校生活を過ごしているか、朝・授業・掃除・放課後の時間を一緒に過ごす中で実際に関わって知ることが大切である。生徒と関わる中で何か指示する場合は細かく丁寧に指導し、直接話すことが苦手な生徒がいる場合は生徒とのやり取りのできる取組を行うべきだろう。ぜひ教育実習では多くの生徒と関わり今まで知らなかった生徒の一面に気付けるよう生徒をよく見て行動してほしい。